
眼鏡

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眼鏡

【Nコード】

N4462B

【作者名】

月姫

【あらすじ】

東京の大学に進学した平次と、大阪の大学を選んだ和葉。遠恋になった2人を見守る、新一と蘭。新一から見た平次と和葉を描きます。本編と、それに連なる短い小噺を数本の予定。

眼鏡

服部が眼鏡を掛け始めたのは、GWが明けて暫く経った頃。別に視力が落ちたわけじゃなくて気分転換だと言ってたが、俺には何となくその理由がわかった。

「よう！」

「おう！」

この春から同じ大学に通い始めた俺と服部。学部も同じだから、毎日のように顔を合わせている。

「レポート、進んどるか？」

「それなりにな」

「余裕やなあ……。提出期限、明日やで？」

「オメーはどうなんだよ？」

「昨夜仕上げたからな、今日、出してくるわ」

「……俺だってな、急ぎの依頼がなければ余裕だったんだ」

「自業自得やな」

楽しげに笑う服部は、今日も眼鏡を掛けている。

初めて見た時には酷く違和感を覚えたが、柔らかな曲線を描くレンズを包み込む深いコバルトブルーのフレームは、今はしっくりと服部に馴染んでいる。

「それより、夏の予定聞いたか？」

「ああ、旅行やら海やらってヤツか？昨日、和葉から電話で聞いたで？」

「蘭と和葉ちゃんが二人で計画してるらしいんだけどよ、オメーに合わせるから、俺からも予定聞いてくれって言われた」

「何でオレなんや？」

「オメーが一番、ドタキャン率が高えからだろ？」

「オマエに言われたないで？」

「事実だろうが」

少しばかり不機嫌そうに片眉を上げる服部に、俺は軽く笑って返した。

服部の予定に合わせると言ったのは、蘭だ。

和葉ちゃんは『アタシらで決めてまお』と言ったらしいが、蘭の方が強引に押し切ったようだ。

蘭は、服部がこっちに来てから、何かと和葉ちゃんの事を気に掛けている。

大学が違うから蘭が服部に直接会う事はあんまりないが、かわりに俺から奴の様子を聞き出しては、彼女に伝えている。

始めのうちはその意図がわからなくて、服部の事ばかり聞きたがる蘭にイラついた事もあった。

だけど、それが遠恋になってしまった二人を心配しての事だってわかったから、今では俺から話を振ったりもするようになった。

実の所、俺も心配ではあるんだ。

初めて服部から志望大学を聞いた時は、やっぱりなと納得したのと同時に、本当に大丈夫なのかと不安にもなった。

学力という点ではなくて、こっちに進学するのが服部一人だって事に。

何せ、依頼先にまで和葉ちゃんを連れ回してたんだ。
そんな奴が、彼女置いたまま東京に出て来るなんて考えられなかつた。

今隣にいる服部は、平気そうな顔をしてるけれど。

「オレはいつでもええ言うといてや」

「ドタキャンは命取りだぜ？」

「オマエには言われたないわ」

そんな会話をしていたら、後ろの方から俺たちを呼ぶ声がした。

この声は、富野と松井。

肩までの、脱色した茶髪っつーか金髪のソバージュ頭の富野と、同じような色したショートボブの松井。

どっちも化粧が濃いのが、多分世間一般ではそこそ美人の部類に入るんだろう。

本人たちもそれが自慢らしい。

そいつらが、学部も違うってのに、入学以来、何かと纏わりついてきて、覚えたくもねえのに、名前まで覚えちゃった。

面倒くせーから聞こえなかったフリしようと思ったのに、すぐ後ろからまた名前を呼ばれた。

仕方なく振り向こうとした時、服部が小さくため息をついたのがわかった。

「おはよう、工藤くん！」

「おはよ」

「ねえ、服部くん。今日お昼一緒に食べよう？」

「工藤くんもどう？」

「スマンけど、オレら教授に呼ばれとるから」

「待っててもいいよ？」

「学食に新しいメニュー入ったらしいしさ」

勝手に話を進めながら、富野が腕を絡めようとしてくる。

鬱陶しいから、荷物を持ち直すフリして、さり気なくかわした。

隣からは『あん！』だとか『もう！』だとか、媚びたような声が聞こえたから、服部の方も適当にかわしたらしい。

富野が服部に向かって『照れてるのお？』などと抜かしてるが、どこをどう見たらそう思えるんだ？

服部、今すげえ機嫌悪いじゃねーか。

周りの空気がぴりぴりしてて、苛立ってんのがわかんねえのか？

……まあ、愛想だけはいいいから、わかんなくてもしょーがねーけどよ、いい加減、相手にされてねえって事に気付けよ。

内心ため息をついた所に、また声を掛けられた。

「よお！朝から美女連れとは、羨ましい限り」

声の主は、吉本。

大学に入ってから知り合った奴で、ちょっと軽薄なトコもあるが、そこそこ気配りのきく男だ。

俺たちの様子を見て何かを感じ取ったらしい。

「彼女たち、悪いんだけどさ、ちょっとコイツら借りてくんな？」

嫌味のない笑顔でそう言うと、ひらひらと手を振って見せる。

コレ幸いと、俺たちは吉本の肩を押すようにして、その場を離れた。

後ろの方で抗議の声が上がったが、ついてはこない。

十分に距離を取った所で、服部が疲れたようなため息をついた。

「助かったわ……」

「いえいえ、美女との語らいを邪魔したら悪いかなあって思ったんだけど、何だか困ってたみたいだからさ。でも、黙ってても女が寄ってくるなんて、羨ましいねえ……」

軽く笑った吉本は、こっちに向き直ると、両手を俺たちの肩に置いた。

「で、助けてやったんだし、御礼代わりに金曜のコンパ出してくれるよな？ お前から来るって言えば、確実に女の子たち増えるし」

「パス」

「オレも予定あるから」

「即答かよ」

少しだけむっとしたような顔を見せた吉本は、すぐにまた笑顔に戻ると、腕時計を指さした。

時間はそろそろ講義が近い事を示している。

教室へと向かいながら、吉本は続ける。

「助けてやったんだぜ？ 1時間くらいでいいからさ、出ろよ。工藤は彼女いたよな？ 連れて来てもいいぜ？ 服部はさ、そこで彼女作れば？ 彼女持ちだってわかれば、寄って来る女も減るんじゃないか？」
「間に合つとる」

あっさりと切り捨てた服部に、吉本は一瞬足を止めた。

「ええっ!? 服部って彼女いるのか?」

「言わなかったか?」

「初耳だよ! あれ? でも、見た事ないよな?」

吉本は俺に振って来た。

「地元にいるんだよ」

「へえ〜。遠恋かあ……」

俺の答えに、吉本は感心したような声を上げた。

「でもさ、それじゃあ、いないも同然じゃん?」

続いた吉本のセリフに、服部の気配が変わる。

一言多いのが吉本の欠点の一つだと、俺は改めて思った。

俺にはそんなセリフ、口が裂けても言えねえぜ。

「吉本、その口、強制的に閉じさせたら?」

服部の笑顔が怖い。

吉本も、マズい事を口走ったとわかったらしい。

青い顔をしてぶんぶんと首を振った。

それこそ自業自得だが、一応さっき助けてもらった恩もある事だし、助け舟を出してやるか。

「服部、金曜の夜に和葉ちゃん来るんだよな?」

「ああ」

「だったらさ、コンパに連れて来れば?」

「めんどいわ」

「いいじゃん、オメーの溺愛っぷり見せ付けてやれよ」

「オマエにだけは言われたないで、工藤？」

凄みを増した服部の笑みに、吉本はすっかりびびってるが、この程度じゃ俺には通じねえ。

「俺も付き合うし、駅には蘭に迎えに行かせるからさ、見せつけとけよ。そうすりゃ、こーいう馬鹿な事言い出す奴も減るんじゃないかねえ？なあ、吉本？」

吉本は、今度はこくこくと頷いた。

「今度のコンパ、俺と服部は出席。但し、彼女が来たら帰るって事でヨロシク」

固まってる吉本の肩を叩いて、いつもの席に着いた。

「何でコンパなん出なアカンねや」

午前中の講義も終わり、学食で大盛りのカツカレーを選んだ服部

は、空いた席に着くなり、疲れたようにそう言った。

ちなみに、俺はきつねうどんとおにぎりのセットだ。

相変わらず、服部はこっちのうどんには慣れないらしい。

よく『大阪の味が恋しい』って言ってるが、正確には『和葉ちゃん
の味が恋しい』んだろう。

まあ、そんな事言ったら速攻で同じセリフ返されるから、言わねえけどな。

「俺もあんまり気乗りしねーけどよ、煩い虫追い払えればラッキー
じゃん？」

おにぎりをパクつきながらそう言ったら、服部はスプーンをくわ
えたままがつくりと肩を落とした。

基本的に人懐こくて愛想のいい服部は、男女関係なく友人を作る
のも上手くて、こっちの環境にもすぐに慣れたようだ。

それに、友人たちと楽しく騒いだりするのも好きだから、コンパ
自体は嫌いじゃないみてーだが、どうやらしつこく絡んでくる女た
ちが鬱陶しいらしい。

俺もそれが面倒で、始めに何回か出て以来全てパスしてきた。

幸い、俺の場合は、結構早い段階で吉本みたいな仕切り屋に彼女
がいるって事知られたから合コンのお誘いは来ねえが、服部は何度
断っても、そっちからのお誘いも減らないらしい。

まあ、わからなくもねえけどな。

服部は背も高いし、武道やってるからか身体のバランスもいいし、

動きも綺麗だ。

あの面食いの園子にも『結構いい男』と評されるくらいにはハンサムだし。

だからと言って、とっつきにくいわけでもなく、どっちかって言えば親しみやすく、話も楽しい。

時々、新聞や雑誌を賑わせる知名度も、女たちには魅力的なんだろう。

その上、俺たちの在籍してる学部は、世間では将来のエリート候補だとか言われてる。

これでフリーだと思われてれば、自分を売り込もうとする女たちが寄って来るのも当然だろう。

吉本に言わせれば、実際合コンともなれば、容姿自慢で玉の輿狙いの女たちも多く集まるらしいし。

容姿自慢とは言っても、生憎と俺や服部の周りには化粧の力に頼らなくてもいいってくらいの美人が揃ってるから、どれほどのモンか疑問だけだな。

それはさておき、確かに服部の事をよく知らない人間には、普段の奴の様子から彼女の影を見つけるのは難しいだろうと思う。

だから、いい機会だとは思うんだ。

中には、遠恋ならまだチャンスはあるなんて勘違いする女もいるだろうけどな。

「あ、服部クンに工藤クン！」

「今、お昼なんだあ」

「一緒してもいいよね？」

返事を聞く前に俺たちの隣を陣取ったのは、富野と松井。

……こいつらなら勘違いしそудな。

「オレら、これから教授んトコ行かならんから」

「えゝ？もう少しいいじゃん？」

「まだ教授もお昼食べてるって」

「急ぎなんだよ」

丁度食べ終わった所だったから、さっさと席を立った。

「そうだ！そっちの学部で金曜にコンパあるんだってね。私たちも
まぜてもらっちゃったんだ」

「楽しみにしてるね」

耳聴いってーか、その行動力は賞賛してやってもいいが、俺たちの
事はほっというて欲しいぜ。

騒がれるのも面倒だから適当にあしらってるが、さすがに我慢に
も限度ってのがある。

「やっぱり、ここまできっちり、惚れ込んでる彼女がいるってアピ
ールしといた方がいいんじゃない？まあ、俺は眼鏡掛けたオメーに
も慣れたけどよ」

学食を出た所でそう言ったら、服部は力が抜けそうな程大きなた
め息をついた。

服部が眼鏡を掛け始めた最大の理由は、恐らく和葉ちゃんが傍に
いないって事だろう。

人懐こくて愛想のいい服部。

確かにそれは奴の性質だが、あくまでも表面に現れてる一部分に過ぎなくて、服部が普段見せる優しさも親切心も全て、他人に対するものでしかない。

だが、それを自分に向けられたものだとは勘違いする女もいる。
自意識過剰な女は特に。

それでも、今まではそんな女がいても、服部の傍にはいつも和葉ちゃんがいたから、よほどの自惚れやでもない限り、あの二人の間には入れないと気付いただろう。

懐が深くて、自分が認めた人間はどこまでも受け入れようとする服部。

俺や蘭の事は認めてくれているが、それはほんの一握りの、ごく限られた人間に対してだけ。

そして、服部が無条件で全てを受け入れ、自分の中に踏み込む事を許しているのは、和葉ちゃんだけ。

大阪にいた時も、こっちに来てからも、それは変わっていないが、服部の傍らには、今、和葉ちゃんはいない。

無理矢理にでも服部のテリトリーに入り込もうとする女たちを留まらせる存在が、今はいない。

鬱陶しいなら冷たく切り捨てればいいのかもしれないが、そういう女たちは後を引きやすくて面倒な事にもなりかねないから、そうする事すら億劫になる。

だから服部は、眼鏡を掛けたんだろう。

あの眼鏡は、自分と周りとを隔てる壁のようなものなんだと思う。

「まあ、1回見せときゃ大抵の奴は理解するだろうし、元々金曜の晩は4人で会う予定なんだからよ、待ち合わせ場所がたまたまコンパ会場だったって事で納得しとけよ」

「……しゃーないか」

小さくため息をついて苦笑する服部に、俺も同じような苦笑を返した。

「そうそう、向こう離れる時に和葉ちゃんに渡した『虫除け』の片割れ、持ち歩いてんだろ？オメーもしとけば？」

「そのセリフ、そっくりそのまま返したるで？」

俺たちの間では、彼女との事に関する隠し事は中々出来ない。

この辺の事はバレバレだ。

顔を見合わせて、二人で声を上げて笑った。

「工藤！服部！今日のコンパ、忘れんなよ！」

吉本にそう念押しされたのは、金曜の午前中の講義が終わった時。周りの連中は、午後の講義が軒並み休講になったのを幸いと、さっさと帰り支度をしている。

「現地集合でええんやろ？」

「勿論！場所わかるよな？」

「大丈夫だ」

「遅刻は5分まで！女の子たちも楽しみにしてるし」

「……勘弁して欲しいわ」

服部が疲れたように机に突っ伏した。

俺も気分は同じだ。

「まあ、そう言うなって」

服部の肩を叩こうとした吉本の手がふと止まった。

「あれ？」

吉本の視線は、服部に向いている。

正確には、突っ伏してる服部の首筋。

「服部、お前もネックレスなんてするんだ」

「へ？」

突っ伏していた服部が顔を上げた。

「気がつかなかったなあ、服部ってそーいうキャラじゃないって思ってたし。で、どんなのが好みなんだよ？」

面白いものを見つけたとばかりに、吉本が服部の首に掛かったチェーンに手を伸ばす。

服部が煩そうにその手を払った。

「何でもええやろ？」

「隠さなくてもいいじゃん？」

吉本はあんまり『懲りる』って事を知らないらしい。

服部怒らせてびびってたの一昨日だったのに、またいらねえちよっかい掛けてやがる。

「やめとけよ。それ、ずっとしてるんだし」

俺の制止は少しばかり遅かったらしい。

手を伸ばした吉本が指に引っ掛かったチェーンを引き寄せようとしたのと、服部がその手を払ったのが丁度重なって、マツトな仕上げの細い銀のチェーンは無理な力に抵抗しきれずに、あっさりと切れた。

「あ……ゴメン」

切れたチェーンは吉本の手の中にあるが、チェーンに通されていたヘッドは小さな硬い音を立てて床に落ち、転がる。

椅子の下に入り込みそうになったそれを、俺が拾い上げた。

「ほら」

「ん、サンキュ」

服部の掌に戻ったのは、内側に小さなルビーが埋め込まれたシンブルなデザインの銀色のリング。

「余計な事すんなや」

「悪い」

吉本の手からチェーンを取り戻した服部が、リングと一緒にシャツのポケットに入れる。

「コンパには行くけど、顔出すだけやで？」

「彼女来たら即帰るからな？」

「わかってるって！とにかく、待ってるから！」

念を押す俺たちにひらひらと手を振って、吉本は足早に教室を出て行った。

「さてと、帰るか」

午後が休講になったから、コンパまで結構時間がある。
一度家に帰って、溜まってる事件ファイルを整理しとくのもいいだろう。

「オメーはどうする？」

「せやなあ……。オレも一度帰るわ。ファイル整理くらいなら出来るやろし……」

「じゃ、また後でな」

軽く片手を上げて、服部と別れた。

約束の時間丁度に服部と落ち合って、きっちり5分遅れで店に入
った。

要するに居酒屋なんだが、店内はモノトーンを基調にしてい
て、ちょっと洒落た感じの店だ。

吉本に言わせると、女の子は雰囲気重視するから、女の子を集
めたかったら、同じ居酒屋でもちょっと洒落た感じの店にしないと
いけないらしい。

まあ確かに、女の子が好みそうではあるし、蘭を連れて来るなら
こんな店がいいかと思うけどな。

「よお！ やつとご到着だな！」

「ちゃんと5分以内だろ？」

吉本に手招かれるように、店の一角を陣取ってる集団に合流した。
ざっと見回してみたが、何だか見覚えのない顔が多い気がする。

「吉本、見覚えのない顔が多いんだけど？」

「オレらの学部内のコンパやなかったんか？」

素朴な疑問をぶつけてみたら、吉本はちょっとだけ申し訳なさそ
うな顔をした。

「そのつもりだったけどさ、他の学部の子も来たいって言うから。
まあ、俺たちにしてみれば女の子が増えるのは歓迎だし、この店、

結構融通が利くしさ」

「俺らは歓迎してねえよ」

低く返して、さり気なく周囲を見渡す。

服部は、入り口が見通せて動きの取りやすい通路側の端に座った。俺も同じようなポジションを取る。

「あ！服部クンと工藤クン！」

「待ってたよお！」

「わあ、ホントに来た！」

集団の真ん中あたりから名前を呼ばれた。

声の中心は、富野と松井。

それに、聞き覚えのある声と聞き覚えのない声が重なった。

「こっちおいでよお！」

「何飲む？一緒に頼んであげるよお！」

「この店、酎ハイならライムとかグレープフルーツとかがお勧めだよ！」

メニュー片手に呼ばれるが、あいつらに付き合う気はさらさらない。

「さすがに、おモテになる」

「迷惑や」

吉本のおどけたようなセリフをあっさりと切り捨てて、服部はウーロンハイを頼んだ。

俺も同じものを注文する。

蘭たちが来るまでのつなぎだから、メニューなんてどうでもいい。

「ねえ、何がいい？」

「スマンけど、もう頼んだから」

向こうからの声には、服部が軽い調子で返した。

気乗りしないとはいえ、楽しんでる連中を邪魔する気はないし、鬱陶しいが、あいつらも悪気があるわけじゃないのもわかってるから、あえてここで波風を立てたくはない。

……ここであいつらに騒がれても面倒だしな。

「取り合えず乾杯からな！」

仕切りやの吉本の合図で、集まった連中がグラスを掲げた。

「工藤君たちがコンパ来るって珍しいよね」

話し掛けて来たのは、たまたま傍に座ってた山口。

同じ学部の子で、明るくさっぱりとした性格と話題の豊富さで、話して楽しい友人の一人だ。

入学したての時から何かと俺たちに構って来るが、押し付けがましい所はない。

多分山口にとっては、俺たちは興味深い観察対象にすぎないんだろう。

何せ、初対面の時の第一声が『私、雑誌に載ってる有名人に初めて会った』だったからな。

「こーいうのって、嫌い？」

「そんな事ないぜ？」

「騒ぐの好きやし」

別に、こう言う場が嫌いなワケじゃない。

コンパ自体は楽しい。

同じ年代の連中が集まって、馬鹿な話で盛り上がりったり、討論したり。楽しく過ごすのに男女は関係ないし、女の子がいる事で話題が広がったりもする。

ただ、必要以上に絡んでくる連中が鬱陶しいだけだ。

「あゝ！山口ずるゝい！」

「私もまぜてえ！」

真ん中あたりにいたはずの富野と松井、他何人かが、周りを押し退けるようにしてこっちに来る。

服部の頬が微かに引き攣ったように見えたのは、錯覚じゃねえだろう。

俺も腰が引けたしな。

「何だかお邪魔みたいだから、私、あっちに行くね」

それだけ言って、山口は空いた席を探すように俺たちから離れて行った。

傍にいたはずの男たちも、奥に追いやられたらしい。

俺たちとしては、蘭たちが来るまで山口や吉本たちと話してたかつたんだが。

「ねえねえ、何話してたの？」

「ここね、鳥がおいしいんだよ？」

「飲み物、まだある？」

それぞれが勝手に話し出すから、聞き取る事も出来ない。
まあ、ちゃんと聞くつもりもねえけどな。

「この後さ、カラオケ行こうって言ってるんだ」

「一緒に行こう!」

「悪いけど、予定あるから」

そう言ったら、一斉にブーイングされた。

「え〜?」

「つまんなあい!」

「服部くんは行くよね?」

「いや、オレも先約あってな」

服部があっさりと断ると、また不満そうな声上がる。

「ちょっとくらい、いいじゃん!」

「行こうよ!」

「スマンな」

そう言って、服部が表情を隠すように眼鏡を押し上げる。

かなり不機嫌だな。

口調は優しいが、眼鏡に触れる仕種が苛立ってる。

一度席を外すか、と思った時、甲高い声が上がった。

「服部くん、指輪してるの?」

「え〜?」

「あ！ホントだ！」

富野たちの視線が、眼鏡を押し上げた服部の右手に集まっている。

やっと気がついたか。

この店に入った時から、してただろ？

服部は気にした風もなく、グラスに手を伸ばした。

服部の右手の薬指にはめられた、銀色のリング。

最近とは色々とごっちゃになってて、女の子でも本来の意味を知らなかったりするが、右手の薬指はステディリングのための場所。

そこにおさまった何の装飾もないシンプルなデザインのリングは、どう見てもファッションリングには見えないはずだ。

俺たちの周りで騒いでた女の子たちが一瞬押し黙り、次にもっと姦しく騒ぎ立てた。

はつきり言って、うるせえ。

女ってのは身に付けてるものに聡いから、あれが何だかわかってるはずだ。

それでも、気付かないフリしてようってのか？

「ねえねえ、よく見せてよ！」

「触んなや」

服部の感情のない硬い声にビックリしたように、松井が伸ばした手を引っ込めた。

「俺たち、この後彼女とデートだから、途中で抜けるぜ？」

そう言ったら、騒がしさがまた増した。

店の迷惑になるんじゃないかねえか？

「うそお！」

「だって、見た事ないよ？」

「噂も聞かないし！」

「ね〜？」

見た事なろうが、噂になってなろうが、どうでもいいだろ？

『彼女がいる』ってのが事実なんだから。

うるささに顔を顰めた時、服部が眼鏡を外した。

「あれ？」

「服部クン、眼鏡なくても平気なの？」

周りの声は、どうやら耳に入っていないらしい。

視線は店の入り口に向いている。

入り口で従業員に話し掛けられてるのは、蘭。

俺たちの席は入り口に近かったからすぐに気がついたようで、小

さく手を振って歩いてくる。

その隣に和葉ちゃんがいた。

服部を見つけたのか、ふわっと笑う。

服部の周りから、イラついた空気が消えた。

同時に、柔らかな笑みが広がる。

優しさと、親しさと、嬉しさと、愛しさと。
そんなものが全部込められた笑み。

こっちの連中は、服部がこんな風に笑うなんて知らなかっただろう。

それが向けられる唯一の女性が、傍にいなかったから。

服部が、ずっと席を立った。

和葉ちゃんはあると数歩つてとここまで来てるのに、待ちきれないらしい。

まあ、その気持ちはわかるけどな。

俺も立ち上がって、蘭を迎えた。

「お待たせ、新一」

「おう、待ったぜ？」

久し振りの感動のご対面を邪魔しないように……ってのは冗談だとしても、俺たちがここに固まったらテーブルの方から様子を伺ってる連中が集まってきそうだったから、蘭の手を取って取り合えず元の位置に戻った。

服部は邪魔にならないように位置を変えながらも、まだこっちに
戻る気はなさそうだ。

「遅なってゴメンな、平次」

「どこぞで寝こけとるんか思たわ」

聞こえてきたのは、相変わらぬの憎まれ口。

だけど、その口調の柔らかさや楽しげな響きは隠しようもなくて……って、隠すつもりもねえんだろうけどな。

「工藤！その美人、誰だ？」

「俺の彼女！」

輪の中からの問いには、きっぱりとそう答える。

当然だ。

虫は湧く前に退治するに限るからな、きっちりと教えとかないと。

俺の隣で、ほんのりと頬を染めた蘭が軽く会釈する。

さっきまで煩く纏わり着いていた女たちは、急にトーンダウンした。

フフン、わかったか。

「工藤クン、あの娘は？」

俺に問い掛けて来たのは、松井。

多分、服部にとってどんな存在なのかって問いだろうが、適当にはぐらかしてやる事にした。

「ああ、和葉ちゃん？可愛いだろ？」

蘭が綺麗で可愛いのは言わずもなだが、和葉ちゃんも可愛くて綺麗だ。

蘭は『綺麗で可愛い』で、和葉ちゃんは『可愛くて綺麗』だ。
この微妙な違い、わかるか？

「何だか安心するね」

蘭が和葉ちゃんたちの方を振り向いて、ふとそう言った。

「何が？」

「ほら、あたしが服部君に会う時って、大抵和葉ちゃんが一緒だったじゃない？だから、二人揃ってないと、何となく違和感があった……」

「ああ、そうだな」

蘭の言いたい事はわかる。

今は慣れたが、俺も始めのうちは何処か落ち着かないような不安定な気分になった。

その理由に気付いたのは、蘭とケンカした時。

『何で、服部の事ばかり聞きたがるんだよ！』とキレた俺に、蘭は『和葉ちゃん、安心させてあげたいんだもん！』と涙目で反論してきた。

そして『新一は親友の事、心配じゃないんだ』と言って、その後3日間、口をきいてくれなかった。

あれは、痛かった。

だが、それでやっと気がついた。

俺を落ち着かない気分にしたのは、服部の傍に和葉ちゃんがないからだって。

そして、もう一つ気付いた事。

いつもと変わりなく見えた服部。

直情型に見えるけど、こいつは結構ポーカーフェイスだったりするんだって事。

改めて、二人の方を見た。

服部の傍らにいる和葉ちゃん。

欠けていたパズルのピースがぴったりとはまった時のように、すんなりと馴染んでいる。

お互いの持っている空気が違和感なく溶け込んで、自然にそこにある感じた。

服部が、その空気を抱き込むように和葉ちゃんの腰に腕を回した。

そのまま少し屈んで、和葉ちゃんの耳元に顔を寄せた。

何か言ったらしい。

さっと頬を染めた和葉ちゃんが、困ったような怒ったような、ちよつと複雑な表情をして、服部の腕から離れようとする。

それを軽く抑えて、服部が楽しげに笑った。

俺の後ろで、ざわめきと言うかどよめきと言うか、そんな感じの声が上がった。

それに混じった小さな悲鳴は、女の子たちのものだろう。

びっくりするのも無理ないか。

あんな仕種、普段の服部からは想像つかねえもんな。

特に、いつも纏わり着いてた富野や松井には信じられない光景だろう。

「工藤、あの娘が服部の遠恋の彼女？」

いつの間にか吉本が傍に来ていた。

「工藤の彼女も美人だけど、服部の彼女も負けてないよな……。うちの学校、女の子のレベル結構高いと思ってたけど、あんな彼女見慣れてたら確かに物足りないよな」

吉本の感嘆の含まれた感想に、俺は小さく笑った。

俺が蘭に惚れたのも、服部が和葉ちゃんに惚れたのも、別に容姿に惹かれたからじゃない。

だけど、確かに彼女は、前にも増して綺麗になっている。

俺が和葉ちゃんに最後に会ったのは、進学先も決まって、お祝いしようと4人で集まった時。

あれからまだ4ヶ月と経っていないのに、高校の頃の可愛らしさと瑞々しさに少しだけ爽やかな色香が加わって、無邪気な中にも何処か女っぽさを感じさせるようになってる。

その見事な変化は、服部が真っ直ぐに愛情を注いで大切に護っていて、それを和葉ちゃんがきちんと受け止めているからだろう。

そして、和葉ちゃんから届けられる純粋な愛情は、服部の足元を固めさせて揺るがないだけの自信を与えている。

だからこそ生まれる、触れる事を躊躇わせるような、安定して満ち足りた雰囲気。

空気を読めない富野たちが、どこまで感じ取れるかはわかんねえけどな。

「あれ？服部君、指輪してる？」

蘭が小さく首を傾げた。

和葉ちゃんもそれに気付いたらしい。

服部に右手を上げさせて、まじまじと見つめている。

あの服部が、指輪をしている事が信じられないんだろう。

服部がペアリングを買ってくれたと和葉ちゃんが蘭に電話してきたのは、高校の卒業式が間近に迫っていた頃。

『はめるのは嫌だけど、ずっと持ち歩いてくれるって言うてくれたんだって。和葉ちゃん、凄く喜んでたよ』と、蘭が自分の事のように嬉しそうに俺に報告してきた。

その事で服部をからかおうとして痛み分けになったから、よく覚えてる。

「和葉ちゃん、嬉しそうだね」

「そうだな」

ふんわりとした笑顔を見せた和葉ちゃんは、とても幸せそうだ。

その彼女から、不意に笑顔が消えた。

服部を少し屈ませると、背伸びをして襟元を覗き込む。

「どうしたんだろ？」

「ああ、あれな。服部って、指輪をネックレスに通してただろ？そのチェーンが切れちゃってな」

「あ、それ、俺がやりました」

吉本が小さく右手を上げた。

「チェーン引っ張って、切っちゃったんだ」

「だから、ケガしてねえか確かめてんだろ？」

「……服部君、相変わらず生傷絶えないね」

蘭の感想はちょっとズレてる気もするが、多分和葉ちゃんもそう思ってるんだろう。

キズを見つけたのか、和葉ちゃんがそつと服部の首筋に触れる。その右手の薬指にはめられた、小さなルビーが埋め込まれた銀色のリング。

ルビーは服部と和葉ちゃんの誕生石だと、前に蘭が言っていた。

何か言われたらしい服部は、苦笑しながらも、和葉ちゃんが好きないようにさせている。

「何だか、ちょっと入り込めない感じだよな」

吉本がため息混じりに言った。

多分、他の連中もそう感じてるんだろう。

さっきまでの喧騒はどこへやら、いやに静かになってる。

気が済んだのか、和葉ちゃんが踵を下ろした。

呆れたような仕種をしながらも、服部が和葉ちゃんに向ける瞳はどこまでも優しい。

「あの娘、何なの？」

もうわかってるだろうに、富野がその問いを口にした。
少し声が尖ってるように感じるのは、気のせいじゃないだろう。

「服部の地元にいる彼女だって」

吉本が、多分あいつらが聞きたくなかっただろう答えを返す。

「遠恋なんて、続かないんじゃない？」

負け惜しみなのか、松井がそんな事を言った。

確かに、遠恋は難しいとよく言われるし、そういう部分はあるだろう。

恋人には、温もりも必要だ。

顔を見て、声を聞いて、温もりに触れる事は、言葉を尽くすより雄弁に気持ちを伝える事もある。

だから、それもままならなくなった事で、気持ちが離れてしまう事も多い。

けれど、この二人は距離すらも上手く取り込んで、大切に気持ちを育てている。

幼馴染だからだろうというのは、理由にはならない。

気持ちなんていつだって不安定で、心も自分ではどうしようもないものなのだから。

「大丈夫ですよ」

蘭が静かに口を開いた。

「服部君、和葉ちゃんの事本当に大切にしてるし、和葉ちゃんも、服部君の事信じてるから。距離なんかで離れちゃうような、そんな弱い絆じゃないもの」

鮮やかに微笑む蘭に気圧されたのか、富野も松井も黙り込んだ。

「確かにな。何たって『鉄の鎖』だからな、そうそう切れねえぜ?」

意味のわからない連中をよそに、俺と蘭は顔を見合わせて小さく笑った。

人間の事だから、絶対というのはない。

それは重々承知しているが、こいつらなら大丈夫だという自信がある。

二人は、大切なものを見失わないように、きちんと努力をしているのだから。

和葉ちゃんが、服部のシャツのポケットから眼鏡を抜き取った。

服部に手渡して掛けさせる。

首を傾げて見上げた彼女が、服部から眼鏡を取り上げた。

どうやら、あまり気に入らなかったらしい。

そのまま、今度は和葉ちゃんが眼鏡を掛けて見せる。

からかうような笑みを浮かべて、服部が彼女から眼鏡を外してポケットに戻した。

服部が眼鏡を掛け始めた事は、和葉ちゃんも知っている。

それがどんな理由からなのかはわからないだろうが。

別に、彼女は知らなくてもいい事だろう。

服部の中でのみ、意味を持つ事なのだから。

「服部い、いつまでそこでイチャついてんだよ？」

「やかましわ！放つとき！」

からかうように声を掛けたら、速攻で返された。

「彼女、紹介してくれてもいいじゃん！」

吉本の声に、奥から野郎どもの同意の声が上がった。

仕方なさそうに、服部が和葉ちゃんを連れて俺たちの隣に来る。
和葉ちゃんが、ぺこっと頭を下げた。

何となく一部女の子たちの視線がイタイ気がするのは、錯覚じゃねえだろう。

勿論、服部も気がついてるはずだ。

その証拠に、和葉ちゃんの腰に回された服部の腕に、少し力が込められたのがわかった。

俺も、蘭を引き寄せる。

まあ、最後の悪あがきってヤツだろう。

いい加減、あいつらもわかっただろうし。

「いやあ、美男美女揃い踏みで、さすがにお似合いですな」

吉本が、場を盛り上げるようにおどけたセリフを口にする。

多分こいつは、ちよつとばかり空気が悪い事に気付いたんだろう。
俺と服部に、意味深なウイंकを送ってきた。

「じゃあ、悪いけど、俺ら抜けるな」

「まだいいじゃん！」

「彼女も一緒に飲もうぜ！」

「ヤボな事言いなや」

引き止める声もあったが、さっくりと切り捨てる。

「また月曜にな」

軽く片手を上げる俺たちの隣で、蘭と和葉ちゃんが小さく会釈した。

「この後、どうすんだ？」

店を出た所で、数歩前を歩く蘭に聞いてみた。

ここに来るまでに、彼女たちの間で今夜の予定が決まってるはずだ。

「まずは晩ご飯食べよう？」

「アタシ、お腹すいてもうて」

俺の声にちょっとだけ振り向いた二人は、楽しげな笑みを見せた。

「オマエ、その食い意地張りのお子様体質、どうにかならんか？」

「……食欲魔人の平次に言われたないで？」

さり気なく和葉ちゃんの隣を陣取った服部がため息混じりに嘆いて見せるが、和葉ちゃんはあっさりと切り返す。

戯れるような二人の掛け合い。

相変わらずの応酬に、凄く安心してる俺がいる。

「何だか、いいよね」

俺の隣に来た蘭が、腕を絡めながら呟いた。

何だか、いい。

「お似合って事だろ? ……俺たちみたいにさ」

そう言ってみたら、蘭に脇腹を小突かれた。

「よう!」

「おう!」

週明けの月曜日、いつものように学内を歩く俺たちに、あからさまに纏わり着いてくる女たちはいない。

……今の所は。

「今日は、眼鏡気分じゃねえのか?」

「ああ、今んとこな」

「和葉ちゃんパワー満タンってか?」

「やかましわ！」

軽く笑う服部は、今日は眼鏡を掛けていない。
今は、自分と周りを隔てる必要はないんだろう。

まあ、あれで諦めてくれるような女ばかりじゃねえだろうし、
知らねえ連中の方が多いから、いつまで続くかはわかんねえけどな。

「工藤！服部！」

後ろから吉本が駆け寄って来た。

「さすがに、今日はのんびりしてんじゃん？」

吉本の視線の先には、富野と松井の姿。
こっちをちらっと見て、そのまま立ち去った。

「あれ、見せつけられちゃねえ、引き下がるしかないよな」

苦笑まじりにそう言った吉本が、服部に向き直る。

「随分、機嫌良さそうじゃん？彼女帰ったの、昨日だろ？」
「そやけど？」

吉本が、にやり、とあまり品の良くない笑みを浮かべた。

「それまでずっと、愛しの彼女と一緒に、それはそれは濃厚なスキんシップを取ったと見た！」

「正解だ」

「オマエら、その口閉じさせたる……」

震えるほどに力の込められた拳から逃げるべく、俺と吉本は足早に教室に向かう。

「待たんかい、コラ！」

振り上げられた右の拳。

銀色のリングは、服部の指におさまったまま、朝の光を弾いていた。

眼鏡（後書き）

『眼鏡』本編はここまでです。

これをベースに、イベントに絡めた短い小噺を数本、予定しています。

この話の中では、平次と和葉の誕生日は7月の設定になっています。
夏っ子です（笑）。

Telephone line (pre「眼鏡」)

GWの余韻もすっかり覚めた5月半ばの土曜の夜。

俺の家のリビングで、ティーカップを前にゆったりと寛ぐ蘭。

ふと見た時計は丁度23時を告げた所。

そろそろ恋人タイムだと思ふんだが、隣に座った蘭はさっきからお喋りに夢中。

楽しげに笑ってる。

蘭とは大学が違っちゃったから、今までみてえに毎日のように会うってワケにはいかねえが、その代わりに、週に1度の外泊をおっちゃんから勝ち取った。

それが今日なワケだ。

なのに、俺の事なんか眼中にないらしい。

「……そうそう、さっき新一に聞いたんだけど、服部君が眼鏡掛け始めたらしいよ?……うん。あたしはまだ見た事ないんだけど。……ううん、そうじゃないみたい。ねえ、新一?」

いきなり蘭が振って来た。

『最近、服部が眼鏡を掛けてる』と話したのは、今日の夕食の時。

春から東京の大学に通い始めた服部と、地元の大学を選んだ和葉ちゃん。

遠恋になった2人のために、それぞれの近況を伝えるのが、最近の俺と蘭の間の重要な会話。

俺は同じ大学に通う服部の事を。

蘭は電話やメールで知った和葉ちゃんの事を。

お互いに情報交換して、2人に提供してる。

ちょっとばかりお節介かもしれないが、当人同士じゃ話さない事や気付かない事もあるし、傍にいらねえ分、心配な事だってあるだろう。

あいつらのケンカは日常茶飯事らしいし、傍から見てもただじやれてるみたいなモンだけど、やっぱり顔の見えねえ会話ってのは誤解を生みやすいから、フォローは必要だしな。

その中での今日の最大の話題は、服部の眼鏡の事。

蘭はお決まりの和葉ちゃんとの電話の中で、その話題を持ち出した。

「ああ、気分転換だって言ってた」

「気分転換だって。青いフレームのやつだよな？」

これも俺宛だ。

今回は頷く。

「……そんな事ないよ。新一なんていいって」

俺はよくねえ。

せっかくの2人きりの時間、もっとこう、あまゝい展開に持ち込めてえんだ。

「でも、服部君が眼鏡かあ……。……。サングラス？……。服部君がサングラス……。何か迫力ありそうだね。……。あははは。何かわかるなあ……」

……。話は尽きないらしい。

「でもさ、眼鏡だったら、今よりもっと格好良くなりそうだよね？……。なるよ、絶対！何て言うかなあ……。こう、知的でクールな感じがプラスされるって言うか……」

いや、あんま変わってねえと思うぜ？

「……。あの服部君だからよ！」

あの服部って、どの服部だ？
話が見えねえ。

「そうだ！新一に写メールしてもらおうか。ねえ、新一？」

「いや、俺には無理」

即答する。

何と言われようと、無理だ。

普通に撮るくらいなら出来るだろうが、あの服部は無理だ。

何の為に撮ってるのかすぐ気付かれるだろうし、そうになったら絶対大人しく撮らせてなんかくれねえ。

断言してもいい。

「もう！新一が一番近いのに！……。近いうちに会えるかなあ？その

時は写メールするから楽しみにしててね」

服部は、俺たちと会う時には眼鏡は掛けねえと思うぞ。
眼鏡を掛けた理由を聞いたワケじゃねえけど、多分掛けねえ。

「そうだ！昨日園子がね」

蘭と和葉ちゃんの電話は終わりそうにない。

和葉ちゃんが埋まってるって事は、ヤツは空いてるって事だ。
俺も携帯を取り出して、服部に電話する事にした。

蘭と和葉ちゃんのホットラインはこれ以上なく強固で、へたな隠し事は出来ねえって教えてやらねえとな。

理由はそう言う事にしとく。

コール1回で服部が出た。

「よう」

『何や？姉ちゃんに振られたんか？』

「ちげえよ！」

『あはは。土曜の夜にオレんトコに電話して来よるから、てっきり姉ちゃんに愛想尽かされたんかと思たわ』

「そいつぁオメーの方じゃねえ？和葉ちゃん、蘭に取られてるぜ？」

『お互い様やろ？』

相変わらずの服部。

軽いからかいはあっさり返されて、いつものように痛み分けになる。

『……せやけど、さっきから話し中なんは、姉ちゃんが相手やったんか』

繋がらない電話に、いらねえ心配してたんだろう。
服部の声に、どこかほっとしたような響きが混じった。

「何だ？和葉ちゃんが恋しくなったか？」

『違うわ！ちよお頼み事があっただけや！』

ちよっとついてやったら、噛み付くように返された。

その反応が面白くて、声を殺して笑う。

それに気付いたのか、携帯の向こうで服部が大きなため息をついたのがわかった。

『まあ、メールでもしとくからええわ』

「けどよ、ほっとくと暫く終わりそうにねえぜ？」

『しゃーないわな。オンナの電話は長いモンや』

「……だな」

俺の隣で、蘭が楽しそうに笑う。

携帯の向こうでは、和葉ちゃんも笑ってるんだろう。

服部に気付かれないように、小さく息をつく。

多分、服部も今の俺みてえに、ちよっと呆れた素振りをしながら、
無邪気に笑う恋人を見ていたいだろう。

普段の服部は、微塵もそんな気配を見せねえけど。

「そう言や、アレどうなった？」

『アレ？……ああ、この間のヤツか』

蘭の電話が終わるまで、無駄話で時間を潰してやるのが俺の優しさ。

感謝しろよ、服部。

結局は、和葉ちゃんがこっちに来るまで、蘭が眼鏡を掛けた服部を撮る機会はなかった。

<オマケ>

新一には聞こえていないので本文には出てこなかった和葉ちゃんのセリフを加えた、蘭と和葉の会話。

「……そうそう、さっき新一に聞いたんだけど、服部君が眼鏡掛け始めたらしいよ?」

『平次が?』

「うん。あたしはまだ見た事ないんだけど」

『……おととい電話した時には何も言うたらなかったけど、視力落ちたのかな?』

「ううん、そうじゃないみたい。ねえ、新一?」

『……工藤君おるし、アタシお邪魔やろ?』

「そんな事ないよ。新一なんていいって」

「でも、服部君が眼鏡かあ……」

『サングラスならたまに掛けとったけど……』

「サングラス?」

『うん』

「服部君がサングラス……何か迫力ありそうだね」

『そうなんよ。サングラス掛ける時って、ちょお機嫌悪かったりするから、余計に怖いオニサンっぽくなってもうて……』

「あははは。何かわかるなあ……。でもさ、眼鏡だったら、今よりもっと格好良くなりそうだね?」

『そうかなあ?』

「なるよ、絶対！何て言うかなあ……こう、知的でクールな感じがプラスされるって言うか……」

『あの平次やで、蘭ちゃん？』

「あの服部君だからよ！」

「もう！新一が一番近いのに！」

『工藤君に無理言わんというて、蘭ちゃん』

「近いうちに会えるかなあ？その時は写メールするから楽しみにしててね」

『うん』

Telephone line (pre「眼鏡」) (後書き)

『眼鏡』 本編より少し前の出来事。

オマケ部分は最初この後書きに入れようかと思ったんですが、それもおかしなものだなと、本文最後に付け加えました。ちよつと余計な部分ですが、彼女たちの会話も含めて楽しんで頂けると嬉しいです。

バレンタインの風景

「よう！」

「おう！」

暦の上では春だったのに、冷たい風の吹く2月の半ば。

いつものように顔を合わせた服部と、これまたいつものように挨拶を交わす。

いつもなら、このまま教室に直行なんだが、今日の俺は重大な任務を負ったメッセンジャーだ。

「これ、蘭から預かってきた。オメーにだよ」

「姉ちゃんから？」

朝っぱらから少々不機嫌な顔をした俺から、小振りの、シンプルな白い紙袋を渡された服部が、怪訝そうな顔をした。

「絶対今日中に渡せって、厳命されてんだ」

「今日って……？」

「何で、バレンタインに蘭がオメーに、それも俺を経由して渡すのか納得いかねえんだけどよ、断ったら今日のデートはキャンセルだって脅されて仕方なくな」

嫌そうに顔を顰めた俺に、服部は面白そうな笑みを返して来た。ヤツの言いたい事はわかるから、口を挟ませねえように先手を取る。

「とにかく、開けてみろよ」

「後でもええやろ？」

「今、ここで開けろ」

絶対零度の声音で命令する。

コイツがそんな程度で屈服するワケはねえが、素直に袋を開けた。

中にはカードも入っていたらしい。

淡い薔薇色のカードを開いた服部が、どこか困ったような、それでいて嬉しそうな笑みを浮かべた。

「何が書いてあんだ？」

カードを取り上げようとした俺の手をあっさりと交わした服部が、袋の中に丁寧なカードを戻す。

「これ、姉ちゃんからやなくて、和葉からや」

「和葉ちゃん？」

「今日、オレに渡してくれて、姉ちゃんに頼んだらしいわ」

それを聞いて、俺も納得した。

今年のバレンタインは平日だ。

真面目な彼女は、講義をサボってこっちに来るなんて事は出来なくて、仕方なく郵送しようと思ってたんだろう。

けれど、それだと留守だったり何だりで、当日受け取る事は出来ないかもしれない。

だから、蘭が早めに自分のところに送るように勧めたんだと思う。蘭から俺を経由して、当日渡すからと。

「……別に、日付なん拘らんでもええのにな」

呆れたような素振りをしながらも、服部は大切そうに紙袋をバッグにしまう。

女の子の好むイベント事を、コイツがどれだけ理解してるのかはわからねえが、それでもこんな日は会いたいモンだろうと思う。

東京と大阪じゃ、そう簡単に会う事も出来なくて、もどかしかったりもするんだろう。

普段の服部は、そんな雰囲気は微塵も感じさせねえけどな。

「代返の依頼ならいつでも受けてやるぜ？」

「工藤に頼むと、高いモンにつきそうやからなあ……」

軽い遣り取りをしながら、教室に向かう。

「法定利率は守ってやるよ」

会いたい時にはいつでも会えるっていう幸運に感謝しつつ、俺は服部の肩を軽く叩いた。

バレンタインの風景（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

ホワイトデーの晩景

「ねえ、新一。和葉ちゃんね、服部君にピアス買って貰ったんだって」

「…………へえ」

蘭が嬉しそうに俺に報告してきたのは、俺ん家に帰って一息ついた時だった。

他に意識が向いていた俺は少しかり反応が遅れたが、蘭は気にならなかったようであつとほつとする。

ちなみに、今日はホワイトデーだ。

先月、愛情たっぷりのチョコを貰ったお返しに計画した、スウィートなデートとちよつとお洒落なレストランでのディナー。

定番すぎるかとも思ったが蘭は喜んでくれたようで、今も機嫌は上々だ。

この分なら、泊まりは無理だとしても甘い展開に持っていけそうな気がする。

そんな、健全なオトコのちよつとヨコシマな願望の機先を制するように、蘭の携帯にメールが届いたつてワケだ。

「服部君、こっちに来る事決めた頃から、何か和葉ちゃんに優しくなったよね。元々優しい人だつてわかつてたけど、何て言うのかなあ…………目に見える優しくさつて言うのか、わかりやすくなつたつて言うのか…………。あたし、今の服部君、好きだなあ…………」

携帯の画面を見ながら、蘭がそれはそれは優しく笑う。

『今の服部が好き』つてセリフに引つ掛かるモンはあるが、恋愛感

情の絡んだ『好き』じゃねえってのはわかってるから、さっくりスルーだ。

ここでスネて蘭の機嫌を損ねたら、折角のムードが台無しだしな。

それはともかく、確かにこっちに來てからの服部は、和葉ちゃんに対して前よりも幾分素直に感情を見せるようになった。

誤魔化すような態度が減ったって感じか？

「くだらねえケンカで時間潰すのが惜しいんじゃないか？」

多分、これが正解だ。

服部と和葉ちゃんのケンカはコミュニケーションの1つってーか、じゃあいみてえなモンだが、いつでも傍にいられた頃ならともかく、滅多に会えねえ今はケンカの優先順位は低いんだろう。

服部が仕掛けなきゃ和葉ちゃんが噛み付く事もねえし、誤魔化さずにはちゃんと気持ちを覚えておけば、いらねえ不安を与えなくて済むしな。

俺なら間違いないと思う。

テレだの意地だの、そんなモンにかまけてて愛想つかされたくねえから。

それでも時々、俺に言わせればくだらねえ事で大ゲンカして蘭を心配させたりしてるのは、ご愛嬌か。

「ホワイトデーにピアスね……。ペアリングに時計に、クリスマスにはペンダントだったっけ？あいつも着々と虫除け増やしてるよな」「和葉ちゃん可愛いから心配なのよ、きっと」

蘭が楽しげに笑う。

「俺も心配だぜ？」

オトコの考える事なんて似たようなモンで、蘭が着けてるアクセサリーの殆どは俺からのプレゼントだったりする。

「じゃあ、これって虫除け？」

「当然。俺のものって意思表示」

蘭の細い手首を飾るブレスレットは、今日プレゼントしたばかりのもの。

しかも、ホワイトデー限定品。

「……あたしも、和葉ちゃんに自慢しちゃおっと」

「あいつらのデートの邪魔しねえように、メール1通だけにしとけよ？」

「うん」

くすぐったそうに首を竦めた蘭が、嬉しそうに携帯を操作する。その様子を眺めてるのも楽しいし、ちょっと優越感に浸れたりもするが、それは取り合えずこっちに置いて、初志貫徹だ。

蘭が携帯を閉じると同時に抱き寄せて、携帯を取り上げる。

俺が釘を刺さなくても、和葉ちゃんからの返事は多分明日までない。

さっきのメールだって、すぐに返事が来るなんて思ってねえだろうし、今頃はきつと無理矢理にでも電源を切られてる。

『大阪の事件がオレを呼んだ』などと嘯いて、嬉々として西に帰ったヤローの手によって。

——俺が今、蘭の携帯の電源を切ったみたいに。

何はともあれ、甘い時間はこれからだ。

ホワイトデーの晩景（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

オレンジデーの情景（1）

4月14日金曜日。

午前中の講義が終わると同時に、アタシは教室を飛び出した。

今からなら1時頃の新幹線に乗れるから、向こうに着いてからちよっとお買い物しても、5時くらいには平次の部屋に行けるはず。

お昼に誘ってくれる友人たちには用事があるからゴメンって手を振って、小振りのポストンバッグ片手に駅へと向かった。

今日行く事は平次には言っていないから、もしかしたら会えないかもしれない。

バイトはないはずだけど、依頼はいつ入るかわからないから。でも、それならそれでしょうがない。

だって、東京行きを決めたのは、今朝だったから。

サンドイッチとお茶を買って、新幹線に乗る。

いつもより少し遅めのお昼を食べて、ほっと息をついた。

本当は、今日行くって言わなかったんじゃないやなくて、言えなかった。『今日』の事を知らないだろう平次に、都合がつかないって言われなくなかったから。

アタシも、今日まで知らなかった。

だけど、だからこそ、こんな行動を起こせた。

約束してたのに会えなかった、なんて事はあったけど、連絡もしないで行くのは初めての事。

誰もいないはずの部屋にアタシがいたら、平次はどんな反応するだろう。

怒る事は多分ないと思う……と言うか、思いたい。

喜んでくれるって言い切りたいけど、ちょっと自信ないから、呆れる方に100点……かな？

それでも構わない。

とにかく、アタシは今日、平次の所に行きたいんだから。

オレンジデーの情景（1）（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

『オレンジデー』はあまりメジャーではありませんが、バレンタインからの流れを締めるいいイベントだと思います。

オレンジデーの情景(2)

そろそろ3限の講義が終わるって時に、俺の携帯が着信を告げた。チラッと見たディスプレイには『高木』の文字。

久しぶりに呼び出しらしい。

マナーモードにしてある携帯は、何度か震えた後、大人しくなった。

「呼び出しか？」

隣に座った服部が小声で聞いてくる。

それには頷く事で返して、俺は簡単にメールを作った。

今日はもう講義はねえから、このまま現場直行でも何も問題は無い。

ただ、蘭にはちゃんと連絡しとかねえとマズい。

特に約束があるわけじゃねえが、きつと夕食を作りに来てくれるだろうから。

メールを送ると同時に、講義が終わった。

「オメーも来るか？」

「当然やな」

携帯で高木刑事と連絡を取りながら聞いてみたら、服部はあっさり返して来た。

荷物を簡単に纏めて、教室を出る。

高木刑事は、正門前まで迎えに来てくれた。

高木刑事の車に乗り込んで、現場に向かいながら事件のあらましを聞く。

服部と2人で幾つか質問してるうちに現場に着いた。

事件現場は、完成間近のマンションの裏にある、造成途中の公園。『KEEP OUT』の黄色いテープの傍には、目暮警部がいる。

車を降りて服部とそっちに歩き始めた時、また俺の携帯が着信を告げた。

足元を気にしながらディスプレイを見ると、メールのアイコンが出た。

多分、蘭からだ。

事件に入る前に確認しておこうと、足を止める。

『了解』って件名の後に続いた本文に、俺は思わず間拔けた声を上げた。

「……は？」

「姉ちゃん、怒らせたんか？」

俺の反応に何を感じたのか、服部がからかうような声を掛けて来る。

別に怒らせたワケじゃねえ。

だが、百聞は一見にしかずだ。

俺はメールを表示させたままの携帯を服部に渡した。

「何や、コレ？」

案の定、服部も間拔けた声を上げる。

「…………オメー、このまま帰れ」

「オレが素直に帰る思うんか？」

「思わねえ」

深く深くため息をついて、俺はもう一度、蘭からのメールを読む。

『事件解決頑張ってね。服部君も一緒でしょ？とにかく早く解決して、絶対に今日中に帰ってって伝えてね。何があっても、絶対に今日中に帰るようにつて。2人一緒なんだから、どんな難事件でも大丈夫だよ？もし服部君が今日中に帰らなかったら、あたしも明日新一の家には行かないから』

蘭が、何で今日に拘るのかわからねえ。

多分、和葉ちゃん関係だとは思うが、蘭も服部も彼女が来るなんて言ってない。

第一、服部にも意味がわかってねえんだ。

わかるのは、今日中に服部が帰らなかったら、確実に蘭の機嫌を損ねるって事だけだ。

とにかく、そんな事態は極力避けたい。

一番確実なのはコイツをさっさと帰しちまう事だが、事件を前にしてるのに、意味もわかんねえ事で帰らせるのは不可能だ。

こうなったら仕方ない。

「さっさと片づけるぞ」

「おう」

並々ならぬ意気込みで、俺は現場に足を踏み入れた。

オレンジデーの情景（2）（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

オレンジデ－の情景（3）

「今日はありがとう。助かったよ」

大学生相手でも律儀に頭を下げる高木刑事を見送って、エレベーター脇の階段を上る。

姉ちゃんからのメールにあったタイムリミットまで、後1時間。何に拘ったのかわからないが、工藤は上機嫌で帰っていったし、終わりよければ全てよしだ。

ポケットから鍵を引っ張り出して、玄関を開ける。暗い部屋の中から、ふわっと柑橘系の香りがした。

人工的なものではない、自然の匂い。

覚えのない香りは、それでもあまり不快じゃない。

手探りで蛍光灯のスイッチを入れた。

白い光の中、オレの目に飛び込んで来たのは、ローテーブルに綺麗に積まれた幾つものオレンジと、クッションを枕に寝てる和葉。

姉ちゃんのオーダーは、今日中に帰る事。

多分、和葉が来る事を知ってたんだろう。

だからって、それが何で今日中なのかは、わからないが。

「ん……」

隣に座って寝顔を覗き込んだら、丁度眠りが浅かったのか、眩しげに眉を顰めた和葉がゆっくりと目を開けた。

「ただいま」

「おかえり」

オレの声に顔を上げた和葉が、まだ少し寝惚けてるみたいに笑った。

「……来るんなら、メールくらいせえ」

「うん、アタシもそうしよ思たんやけど、決めたの今朝やったから、ダメや言われたらイヤやなあって……」

もそもそと起き上がった和葉が、枕にしてたクッションを抱き締めてごによごにと言う。

何だか赤くなってるように見えるのは、気のせいかな？

「せやけど、姉ちゃんは知っとったんやろ？」

「蘭ちゃん？」

「今日の午後、呼び出し掛かった工藤と一緒に現場行ったら、姉ちゃんから工藤に、オレは絶対に今日中に帰れてメール入ってな。姉ちゃんの絶対命令やったから、超特急で片づけて来たんや」

そう言ったら、和葉はますますクッションに埋もれた。

「今朝、蘭ちゃんと電話しててイキナリ思いついて……。せやけど、行こうかな言うただけやよ？」

「オレが帰らんかったらどうするつもりやったんや？オマエ来るなん知らんかったから、休み中ずっと飛び回ったかもしれんで？」

「それはそれでしゃあないし、もしかしたら会えんかとは思たけ

ど、アタシは今日来たかったし……………」

「何で『今日』なんや？」

和葉も、何故か『今日』に拘ってる。

不思議に思ってた聞いてみたら、クッションに埋もれた和葉が耳まで真っ赤になって、テーブルの上のオレンジを指差した。

「オレンジ……………」

4月14日という日付とオレンジ。

記憶の引き出しを引っ繰り返すようにして検索した結果は…………。

「『オレンジデー』か……………」

和葉や姉ちゃんが『今日』に拘った理由。

それは、オレにとってはかなり嬉しいものだった。

「アタシも、今朝知ったん……………」

日本ではあまり馴染みのない『オレンジデー』。

それを知って、来てくれた和葉。

「突然やろうと何やろうとダメやなんて言わんから、連絡だけは入れろや」

「うん……………」

赤い顔してクッションに埋もれてる和葉を見てたら、オレも何だか照れ臭くなった。

何となく落ち着かない気持ちを誤魔化すように、テーブルの上のオレンジを取って爪を立てる。

甘酸っぱい爽やかな香りが、オレたちを包み込むようにふわっと広がった。

オレンジデーの情景（3）（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

オレンジデーの情景（4）

「よう！」

「おう！」

4月17日月曜日。

大学の正門前で会った服部と、いつもの挨拶を交わす。

「楽しい週末だったようで」

「そっくりそのまま返すわ」

機嫌良さそうな服部をからかってみたら、いつものように痛み分けになった。

金曜日の蘭からの絶対命令。

その意味を知ったのは、事件を解決して帰宅した時。

俺の家で待っててくれた蘭と、リビング一杯に広がったオレンジの匂いで、気がついた。

4月14日は『オレンジデー』。

気付かないフリをしてたら、軽い夜食の後デザートにとオレンジゼリーを出して来た蘭が、少し恥ずかしそうに白状した。

朝、和葉ちゃんと電話してる時に時計代わりにつけてたTVでその話題が出て、丁度週末に重なってるからと、おっちゃんを説き伏せて外泊の許可を取って待ってた。

和葉ちゃんのはつきりと来るとは言わなかったが、きっと来るは

ずだから、ちゃんとその日のうちに会わせてあげたかったんだと。

いつも俺の都合を優先してくれる蘭の、こんな時の我侭は凄く可愛い。

『オレンジデー』はたった1時間で終わっちまったが、翌日遅ればせながら、俺は蘭にオレンジの花のモチーフのブローチを贈った。

そこまではいいんだが……。

「オメーが朝からジュースって、珍しいな」
「オマエもな」

服部の手には紙パックのオレンジジュース。
俺の手にはペットボトルのオレンジジュース。

顔を見合わせてお互いの状況を確認すると、2人揃ってため息をつく。

ふと視線を外して、同時に遠い目をした。

「冷蔵庫ん中、オレンジ一色や」
「ああ、俺んトコもそうだぜ？」
「あのデカイ冷蔵庫がか？そら、壮観な眺めやろなあ……」
「オメーんトコ、冷凍庫あったよな？」
「……キレイなオレンジ色になっとるで？」

服部の部屋には、冷蔵庫の他に冷凍庫もある。

一人暮らし、それもヤローなら小型の冷蔵庫で事足りるハズだが、結構内容が充実してたりする。

特に、和葉ちゃんが帰った後は。

初めの頃は服部の部屋になかったハズの、小型の冷蔵庫と並んだ同じサイズの冷凍庫を見た時には思わず笑っちゃったが、俺ん家にある標準的なご家庭サイズよりもデカイ冷蔵庫の、これまたデカイ冷凍庫の中身を思い出して、これ以上ねえってくらいに納得した。

俺も服部も、はっきり言って料理は苦手だ。

いつぞやは、きゅうりを綺麗にくつつけたまま切るって言う高等テクニックを披露した事もある。

さすがに、今は簡単なものならそこそこ上手く作れるようにはなったが。

それでも、やっぱり自分のためだけに料理するなんて面倒で、つい外食やレトルトに頼っちゃう事が殆どだ。

それを知ってる蘭は、しょっちゅう家に来て料理を作ってくれるし、保存のきくものを残しておいてくれたりもする。

外食やレトルトが悪いとは言わないが、そればかり続くのは健康にも良くないからって事らしい。

『和葉ちゃんも心配なんだよ、きつと』

服部の部屋にあった冷凍庫の事を話した時、蘭はそう言って笑った。

俺んトコも服部んトコも、冷蔵庫や冷凍庫には彼女たちの愛情がたっぷり詰まってる。

今現在は、これでもかってくれーに目一杯。

蘭も和葉ちゃんも『やると決めたらとことんやる』タイプだから。

「まあ、『朝の果物は金』言うし……」
「だな」

ストローをくわえた服部に倣って、俺もペットボトルを傾ける。

冷蔵庫や冷凍庫に鎮座する、ジュースやゼリーやヨーグルト、シヤベツトにジャムにケーキetc。
手作り既製品混在の、オレンジのオンパレード。

別に1人で完食しなきゃならねえワケじゃねえんだろうが、こればかりは誰にもわけたくねえ。

幸い、賞味期限には気を配ってくれたようだし、まあ、地道に消化していけばいいだろう。

少しばかり独占欲の混じった意地で、オレンジジュースの残りを一気に飲み干す。

隣を伺うと、先に飲み終わってた服部と目が合って、どちらからともなく笑った。

俺と服部の気持ちは、多分一緒だ。

彼女の愛情がくすぐったくて、でもどっかズレてる気がして可笑しくて、そんなトコもやっぱり愛しくて。

「GW、どこにする？」

大型連休や長期休暇は、いつも蘭と和葉ちゃんが色々と計画してくれるけど、たまには俺たちから提案してみてもいいだろう。

時季的にちょっとキツイかもしれないが、そこはそれ、こんな時

のためのコネだ。

「春を追って北上ってのもええんやないか？」

「ああ、それもいいな」

教室に向かいながら、あれこれとプランを立てる。

「まずはスケジュールの確認だな」

授業まではもう少し時間がある。

善は急げだ。

いつもの席に着くなり、俺と服部は携帯を開いた。

余談だが、服部が和葉ちゃんに何をプレゼントしたのかは、蘭からの報告待ちだ。

オレンジデーの情景（４）（後書き）

2006年のカレンダーを基準にしています。

『眼鏡』シリーズ、一旦ここで終了です。

まだ幾つか話のストックはありますが、流れとしてキリがいいのでENDマークを付けさせて頂きました。

また投稿出来るくらいに小説が纏まったら、新しく『眼鏡』シリーズとして投稿させて頂き下さい。

メッセージやリクエストを幾つも頂いています。

ありがとうございます。とても嬉しいです。

ここに書くのもおかしいのですが、纏めてお返事させて頂きます。

『オレンジデー』では、話の展開上必要だったので平次と和葉の視点を絡めています。今回の『眼鏡』シリーズは「新一視点で平和を描く」というのを基本としています。

そこを崩してしまうとこの話はシリーズとしての纏まりを欠いてしまいますので、今回は『新蘭を抜きにした平和』は書けませんでした。

平和の甘系の話をご希望の方にはちょっと物足りなかったかもしれませんが、送って下さったリクエストについては次回の参考にさせて頂くということでご了承下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462b/>

眼鏡

2010年10月14日22時04分発行